

ル フ ラ ン

芦原すなお

実業之日本社

ルフラン

著者／芦原すなお

*

初版第1刷／1995年3月25日

発行者／増田義和

発行所／株式会社実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9／振替00110-6-326

郵便番号104 電話03(3562)2051〔編集〕(3535)4441〔販売〕

*

印刷所／大日本印刷

製本所／石毛製本所

*

©SUNAO ASIHARA, Printed in Japan 1995

落丁本、乱丁本は本社でお取りかえいたします。

ISBN 4-408-53249-5

目次

アザレ・サンセリテ	5
バグ・フィーバー	33
ポプリ	61
ホワイト・ホース	89
ヴィジョン	117
グリーン・アイズ	147
ルフラン	175
レストロ・アルモニコ	203

装画・题字／飯野和好
装幀／安彦勝博

ル
フ
ラ
ン

アザレ・サンセリテ

「ちくしょう！」啓太郎は苦勞して寢返りを打ちながら吐きだすように言った。「何やってんだ、あいつ」

あいつとは妻の沙樹子のことだ。小一時間も前から、病室の壁に掛けた時計を見ては、啓太郎は同じことを繰り返していた。「あいつ、何やってんだ！」

生まれつき頑健な體質の啓太郎は、四十三のこの歳まで入院などしたことがなかった。幼いころは医者にかかったこともあったが、それも数えるほどだろう。それが、彼の数ある自慢の一つだった。ところが今やこのさまだ。殺風景な部屋。胸が悪くなるような臭氣。だんだん腹が立つてきた。それに不安と仕事上の焦りと、妻を待ついらいらが混じりあう。

「あいつ、何してやがんだ、まったく！」と、啓太郎はまたつぶやいた。そもそも啓太郎がこの菅谷医院に入院したのは、妻に誘われてはじめてやったテニスで腰を痛めたからなのである。

啓太郎は山陰の山奥の、小さな造り酒屋の長男として生まれた。姓は神酒井^{みきい}というが、明らかに代々の家業に由来するものだろう。

その山奥の村は一言で言つて貧乏な村で、村人の暮らしは、冠婚葬祭の除いて酒など買うどころではなく、せいぜい自家製のきい悪いドロクを飲むくらいだから、酒屋だつて貧乏である。だけど、面白いことにみんなが貧乏だと、それなりになんとかやっていけるもので、細々ながら商売はつづけてこられたのだつた。

戦後になつて事情が変わつてきた。農家はレタスやメロンなどのハイカラものへの転換が当た

って次第に金回りがよくなってきたのに引換え、相変わらずまずい酒しか造れなかった神酒井酒造のほうは、大手メーカーの安くてまともな製品がどつと入ってきたため、あっさり競争に敗れ、啓太郎が中学のとき、ヤケ酒ばかり飲んでいた父が脳溢血で憤死してしまったのをしおに、商売をたたんだ。それでも、山林田畑がいくらかあったので、それを切り売りして、啓太郎は東京の有名私立大学を出ることができた。

だが、裕福な家庭の子弟ばかり集まる私立大学での生活は、けっしてバラ色などではなかった。周りはおおかた裕福な家庭の坊ちゃん、嬢ちゃんばかり、かつかつの仕送りしか受けてない啓太郎にとって友達づきあいはきつかった。彼は入学した最初の一年間は、すりきれた高校の制服で通した。「あら、素敵、バンカラね」などと珍しがってくれる女子学生もいたが、無論好きでやっているわけじゃない。言ったのが男だったら、張り倒すところである。

それにしても、東京の女子学生はいいもんだと、啓太郎はつくづく思った。お嬢様というものはじめて見たのである。近づきたくてしかたなかったけれど、現在の半分も厚かましくなかったから、ただ遠くから彼女らの心地よい声を聴き、闊達で伸びやかなその姿を眺めているだけであつた。その顔つきは、駄菓子屋の硝子^{ガラス}ケースを覗きこむ幼い日の彼と少しも変わっていないかつた。

そこから生じる鬱憤のいくらかを、彼は家庭教師として教えながら、金持ちの坊主をいびることで発散したりしたが、発散し残した分はむしろ意識的に胸の内に蓄えていった。これには、一種被虐的な快感があつた。周りの人たちは何とも思つてはなかったのだけれど、啓太郎は自分の

境遇を甚だしく屈辱的なものと積極的に認識し、この屈辱をバネにして自分は飛躍するのだと己に言い聞かせ、生い立ちによって育まれた復讐心と功名心をさらに研ぎ澄ましていった。だから、当時の学生にしては、珍しい勉強家だった。「見返してやる」という言葉が、祈りのように彼の胸中で燃え盛っていたのだった。

あるとき友人の家に遊びにいったことがあった。その屋敷の立派なのと、友人の母親の若々しくて美しいのに圧倒された。そして、生まれてはじめてギターを手にしたのだが、教わってCだのAマイナーだのコードを弾いてみても、全然うまくやれない。当たり前であるが、彼はこれに己の運命を象徴する出来事と受けとった。自分はこれらの青春謳歌野郎どもとは違った星のもとに生まれたのだ、と、改めて胸に刻んで陰惨な喜びを味わった。

「あいつらはばかだ」という彼のひとりごとの癖がついたのは、この鬱々たる思いをおかず代わりに食って生きた学生時代である。彼によれば、音楽や文学に熱をあげるのも、学生運動をやるのも、確たる将来のヴィジョンなしに大学にきているのも、みんな「ばか」なのであった。

啓太郎は就職浪人してまで念願の一流商社に入った。入社が決まった日、ひとり新宿にて、生まれてはじめて浴びるほどビールを飲み、泥酔し、喧嘩までした。翌日目を覚ましてぞっとしたが、警察沙汰にもならず、たいした怪我もせずにすんだことを、開運の象徴と受けとった。「よし、ツキがきたぞ」と、ひとりつぶやいたものである。

確かに、啓太郎にツキが回ってきたようだった。彼は希望通り営業部に配属され、夜昼かまわず遮二無二働くことで、めきめき頭角をあらわし、直属の「ばか」課長には嫌われたが、部長に

いたく気に入られた。「ぼくはこの会社を、いや、この営業部を死に場所と思っています」という、酒席で何気なさを装って洩らした一言に、ころりと参ったのだった。海千山千の凄腕といわれる部長にこんな台詞が感銘を与えたというのも、不思議といえど不思議だが、この台詞は半ば啓太郎の本音でもあったから、力が籠もっていたのだろう。あるいは、部長自身、啓太郎と同じような人間で、彼の中に若き日の自分を見たのかもしれない。ともあれ、部長は啓太郎を腹心として取り立て、次女を嫁がせた。そして啓太郎は四十になる前に、「ばかな」先輩同輩を尻目に、会社の花である石油部門の営業課長に拔擢され、大きな一戸建てとペンツを持つ身となったのである。

この拔擢に關していろいろ陰口を叩かれたことを、啓太郎はよく承知している。彼はじっと待っていたわけではなくて、義父と相談のうえで、怪文書やら何やらの工作もやっていたから、自分が潔白だなどとは思っていなかった。だが、こんな社会で、こんな会社でやっていく以上、それは当然暗黙のうちに許容されている方便と割り切っていた。やられたほうが「ばか」なのである。それに、啓太郎の仕事ぶりは確かに凄まじいもので、二十代、三十代の半分は海外で暮らした計算になるし、日本にいるときも、三日に一度はホテルや仮眠室で寝泊まりしたのだ。「文句があるか」というのが、彼の第二のひそかなる口癖となった。

しかし、後厄を過ぎるころから、さすがに体力の衰えを自覚するようになった。つい先日も三階から五階まで駆けあがっただけで、息が切れて眩暈がしたのである。先の新宿泥酔事件以来、ずっと酒は自制していたのだけれど、それでもこのごろは朝残っていることがよくある。

「近頃はどうもだめだね、すっかりスタミナがなくなっちゃった」と、啓太郎は食後の大ゲップをしながら言った。このゲップは、育ちのいい妻に対する屈折した当てこすりである。

「いやだわ」と、高校二年の長女が言った。「食欲がなくなっちゃう」

誰に食わせてもらつてると思つてゐるんだ、と怒鳴りつけたい気持ちを無理に茶とともに飲み下す。そういうふうには振る舞えない家庭の雰囲気になつてしまつてゐるのだ。それに、どうも近ごろは長女に氣後れする。なぜだろう？

「ね、あなたもテニスなさつたら？」と、妻の沙樹子が言う。「それがいいわ。ねえ、向後こうごさんのご夫妻も前から勧めて下さつてゐるのよ」

妻の口調は、まるつきりテレビ・ドラマの良家の奥様である。この場にはいない人間にまで敬語を使う。啓太郎にはその氣が知れない。結婚したところは、その口調が心地良くて、聞くたびになんだか股ぐらがくすぐつたいような快感を覚えたものだが、最近は何しろ氣味悪くさえ思ふことがある。この女、いったい何を考へてゐるんだろう？

「テニスか」ゴルフはやるが、そんなものやつたことがない。

「似あわないよ」と、小学校五年の次女がぞんざいで生意氣な口をきく。中三の息子はもくもくと皿の上の物をフォークでかきこんでゐる。

「そうだよ、みつともないよ」と、長女がご丁寧に顔までしかめて言つたから、啓太郎の心が決まつた。

「やつてもいいぞ」

「ホント？ わつ、よかった！」と、いかにも嬉しそうに妻が手を打って言う。まるで少女の仕種である。娘たちよりよほど初々しい。こいつ、ほんとは、何を考えてんだろう、と啓太郎はまた思う。これまで数限りなくこの妻を裏切ってきたが、何にも気づいてないんだろうか？

ともかく、そんなわけで啓太郎は、入社以来はじめて四月の末から連休過ぎまでまとまった休暇をとり、そのうち、はじめの三日はテニスをやることにして、妻のテニス・スクールの友達の夫婦と、軽井沢の高級リゾート・ホテルで合流したのであった。

はじめてのテニスはさっぱりうまくいかなかったが、来てよかったと思わせるものもあった。相手の細君がびっくりするほどの美人だったのだ。さっそく啓太郎はひそかにあれこれ想像して楽しんだ。

その亭主は背が高くてテニスのうまい男だった。背が高くてテニスがうまいのなら、きつとばかに違いない、と啓太郎は思った。そのほかが一応親切そうに、しかし、明らかに人を侮あなづつて教えてくれるのが、癪しやくにさわった。車の話になって、そいつが同じペンツでも自分よりワン・ランク上のやつを持っていると知って、ますます癪にさわった。

他の三人はしばらく思い思いに球を打ちあっていたが、練習ばかりじゃ詰まらないので、ダブルスの試合をやるうということになった。啓太郎の妻も、いちいち「あらあら」と言いながら球を追っかけるようなヘタクソなので、互いにパートナーを取り替えてやることにした。

「スワッピング・ダブルスだな、うふふ」と、啓太郎は胸の中で呟いた。ばかにしては、気の利いたことを考えるじゃないか。

サーブするパートナーの、トスして伸びあがる様が実にいい。伸びあがると同時に、ほっそりしたふくらはぎがキュツと締まる。また、やや出かかった臍へそのすぐ下の肉の曲線が、なんとも優美である。まさに旬しゅんだなー、と思いつながらぼんやり見てたら、

「ほら、ヴォレー！」と叫ぶので、とっさに振り向くと球が勝手にラケットに当たってうまくパツシングになり、まんまとこちらのポイントになった。どんなもんだい。

すっかり得意になって、次は果敢に右に跳んでレシーブしようとした。ところが、このとき、腰に激痛が走った。かくして、第一セットの第一ゲームで、啓太郎チームのTKO負けとなったのである。

二泊の予定をキャンセルして、妻に運転させて帰京した。その間絶え間なく、相手の「ばか」亭主と、テニスという「世にも下らない遊び」と、そんなものを「大事な体」の夫にさせようなどと思いついた「浅はかで浮ついて不届きな」妻の悪口をぶつぶつと言いつづけた。妻は最初のうちはすまなそうに相槌を打っていたが、八王子インターを過ぎてからは、じっと前方を向いたまま、まったく何も言わなくなった。そして、「もう二度とテニスなんかやらないからな」と、七回目の憎まれ口を口にしたとき、「ええ、それがいいわね」と、いやにきっぱり返事をしたので、啓太郎はちよつと驚いた。

一晚寝て起きるとさらに悪化していた。トイレに行くにも四つん這よいでそろりそろりだから、ひどく時間がかかる。これじゃあどうしようもない、ということ、親子で病院を経営している友人に電話したところ、運よく個室が空いていたので、思い切って入院することにしたというわ

けである。

ゆったりとした足音が近づいてきた。この悠揚迫らざる足取りは医者でも看護婦でもあるまい。「やつと来やがった」と、啓太郎はつぶやいた。ドアの外から声が聞こえる。

「お世話になります。わがままな人ですけど、どうぞよろしくお願い致します。」

看護婦に挨拶しているんだろう。世にも不機嫌な顔をしてやろうと、啓太郎は決める。

「どーお、あなた？」と、沙樹子は朗らかな声で言った。

「見りやわかるだろう」

「あら、いいお部屋なこと。日当たりもいいし」沙樹子は大きなペーパーバッグを簡易ロッカーに入れながら言った。「これ、浴衣ゆかたと下着の替え」

啓太郎はぶすつとした顔で窓の外を見ている。

「それで、どういとお見立て？」

「ゆうべ一晩寝ただけだ。まだ医者に診てもらってない」

「そう。あら、もうこんな時間だわ」

（そうだ、こんな時間まで何してやがった。もう、三時過ぎだぞ！）

「あたし、もう行かなきゃ」

「行くって、どこへ？」

「伊豆の、お父様の別荘よ。お話ししてたでしょ？」

「そうだったな」と答えたが、啓太郎は内心驚いた。こういう状況になっても行くつもりなんだろうか？

「六時からみんなでお食事することになってるの。お姉様がとっても素敵なお店に予約入れてくれたんですって」沙樹子は、いつの間にか小さな鈴をつけたベンツのキーをもてあそびながら言った。

ここでは非得意の念の入った厭味いっみを一つ、と思ったが、こんなときに限って出てこない。

「とっても素敵な病院でよかったわね。それにあなたは身の回りのことならなんでもできるから、こんなときは助かるわ」

これは逆に沙樹子の厭味いっみなんだろうかと、啓太郎はふと思う。

「それから、これ、お願いね」

沙樹子は、足元に置いたビニール袋から白い陶器の植木鉢を取りだし、ベッド脇の簡易ロッカーの上に置いた。丈二十センチほどの小さな木だが、葉は白っぽく色褪あせて、沢山ついた白い蕾つぼみにも薄茶色が広がっている。

「何だ、これ？」

「アザレアよ」

「アザレア？ ツツジか」

「アザレ・サンセリテという品種なの」

「こんなもの、どうした？」